

ベ ス ト ピ ア  
Bestopia

「パリ通信 76号」

<http://jkoga.com/>

平成三十年四月  
第七十六号

< 2018年4月 >

古賀 順子

「マイヨル美術館  
『フジタ展 熱狂の時代に描く』」

4月に入り、パリにもようやく遅い春が訪れ、街路樹の緑が日に日に目立つようになった。

フランス国鉄 SNCF の長期スト(二日ストライキ三日通常運転を6月末まで繰り返す強行姿勢)、エール・フランスのスト、大学入学選抜試験導入に反対する学生ストとストライキの春で、ストライキ・カレンダーを見ながら動いている。遠出ができない日に、没後50周年を記念する「フジタ展」(7区グルネル通り61番地マイヨル美術館でパ3月7日から7月15日まで開催予定)へ行った。

日本を出発した1913年から、1933年一時帰国するまでの作品を中心に100点以上が展示されている。1917年、渡仏前に日本で結婚していた最初の妻登美子を離縁し、パリでフェルナンド・バレイと再婚。1923年ユキ(本名リュシー・バドゥー)と知り合い、フェルナンドと別れる。1931年にはそのユキとも別れ、新しい恋人マドレーヌ・ルクーを連れてパリを離れて南米旅行を経由し、1933年東京に凱旋するまでの20年間だ。モジリアニ、ザッキン、スーチン、キスリング、ピカソを始めとする外国人芸術家がモンパルナスに集まっていた「熱狂の時代(レ・ザネ・フォル)」、外国人芸術家がフランスの芸術を牽引した「パリ派(エコール・ド・パリ)」時代。藤田嗣治は画家として一気に頂点を極める。ヨーロッパで現代絵画が動き始めた時代である。

1890年から1905年のフランスは、印象派ののち、画家は何ができるかの模索の時期だった。1890年ゴッホ、1904年ゴーギャンが亡くなる。この二人が「色」による人間の内面表現(感情、感覚、不安、喜び、怒りなど)としての絵画の道を開く。ギリシア・ローマ時代から、絵画は美であり、調和であり、理性であり、偉大な自然や人物を写し取るという確固たる存在理由が続いていた。デッサンこそがアカデミズムの礎である

伝統の中で、色による新たな絵画を開いたのがゴッホ、ゴーギャンであり、マチスへと引き継がれる。マチスは色の画家、ピカソはデッサンの画家という図式で捉えられる通りである。

そのマチスが中心となり、1905年夏、地中海に面した町コリウールに画家たちが集まる。アンドレ・ドララン、シャルル・カモワン、アルベール・マルケ、アンリ・マンガンら「フォーヴィスム(野獣派)」と呼ばれる人たちだ。熱い夏の浜辺は赤い色の砂で描かれ、緑色の顔の人物が描かれるなど、強烈な色彩による絵画表現が誕生し、古代から続いてきた自然に似せることに終止符が打たれる。1900年には写真芸術が誕生し、否応なく絵画の存在理由が問われる。そして、1907年ピカソの『アヴィニョンの娘たち』(アヴィニョンは南仏ではなく、バルセロナの娼婦街がある通り名)によって、現代絵画キュビズムが新しい芸術を提示する。

フランス「フォーヴィスム」の影響を受けて、ドイツでは1910年から「表現主義」の画家たちがベルリン(キルシュナー、ヘッケルらの「ブルック(橋)派)とミュンヘン(カンジンスキー、ジョーレンスキーらの「ブラウ・ライター(青い騎士)派)として活動を開始し、カンジンスキーの芸術理論により「抽象絵画」が確立される。

こうしたヨーロッパの現代絵画が躍動する時代に渡仏したフジタの成功は何を物語っているだろう。フジタは、ピカソと同じくデッサンの人であり、アカデミズムの画家だ。フジタは「フォーヴィスム」にも「キュビズム」にも感化されず、日本画の岩絵具、金箔、筆を使い、日本画のテクニックを活かした油彩によって独自の道を歩み続けている。フジタ特有の乳白色の女性の肌は、強烈な赤や緑の肖像画の中で魅惑的な東洋の美の世界を表現していた。猫、子ども、裸婦、自家像、静物、屏風絵、フレスコ画など、フジタ生涯のテーマとなる作品が展示されている。1929年世界大恐慌までの短い期間であるが、自由奔放なパリ生活を謳歌し、仮装舞踏会に出掛け、当時始まったばかりの海水浴をビデオ撮影する異色の日本人芸術家フジタの姿を見ることができる。